

現代の家族状況から見る子どもの社会情緒的発達
Children's Socio-Emotional Development in Modern Family Contexts

研究代表者 本島 優子 (D2) 教員 遠藤 利彦
研究分担者 石井 佑可子 (D3) 川崎 裕美 (M2) 大槻 綾 (M1)

〔研究目的〕

家族は、子どもが発達していくうえで、もっとも身近で直接的な、重要な社会的文脈の場である。現代の日本では、晩婚化、少子化、核家族化、離婚の増大、虐待・ネグレクトの急増などにより、子どもを取り巻く家族のあり方が大きく変貌しつつある。家族の形態や構造、機能が大きく変遷していくなかで、子どもは、家族という社会的文脈の中で、どのように発達していくのだろうか。また、子どもの健全な心理的発達を支える家族のあり方とはどういったものなのだろうか。本研究では、子どもにとってもっとも身近で重要な育ちの場である家族という社会的文脈の視点から、特に子どもの社会情緒的側面に関わる発達や問題を中心に、インタビューや観察、質問紙を用いて、子どもの発達について検討していきたいと考える。

〔研究経過〕

家族と子どもの発達をテーマに、各メンバーが自身の関心領域に従って、具体的な研究テーマ・目的を設定し、各自でインタビュー・観察・質問紙による調査活動を行った。

〔研究成果〕

(1) 家族の情緒的雰囲気と子どものアタッチメントとの関連性 (本島優子)

家庭内の情緒的なやりとりや雰囲気の質が子どものアタッチメントの安定性にどのように影響するのかについて、母子 32 組を対象に検討を行った。生後 9 ヶ月に家族の情緒的雰囲気について母親に質問紙での評定を求め、生後 18 ヶ月に観察を通して子どものアタッチメント安定性を測定し、両者の関連性について検討したところ、有意な関連性は認められなかった。直接的な子どものアタッチメントへの影響は認められなかったものの、家族の情緒的な雰囲気は、母親の養育行動に影響を与え、ひいては子どもの

発達に影響を及ぼす可能性が考えられ、今後は、母親の養育行動も含めた媒介的な影響プロセスの可能性について検討を行うことが必要であろう。

(2) 青年期の関係性に応じたコミュニケーションスタイル (石井佑可子)

非行少年の対人関係行動、特に社会的スキルの特徴について検討するため、非行少年を対象に質問紙調査を行った。結果、非表出スキル(相手に自分の意図を伝えない、回避や欺瞞を含むコミュニケーションスタイル)の行使において、対照群(高校生)は相手との関係の親密性が低くなるにつれて行使頻度が高まるのに対して、非行少年は、相手との関係の親密性が低くなるにつれて行使頻度が少なくなるという結果が得られた。非行少年が「街で知り合った友達」と簡単に親しくなってしまうたり、「逸脱した友人」が身近にいる場合、同調して自らも非行に関わってしまいやすかったりするの、こうした非行少年の特異的な対人関係行動の特徴が背景にあるのではないかと考えられる。

(3) 乳児のコミュニケーション発達を導く母親 (川崎裕美)

子どもの気質が母親の乳児の情動の読み取りにどのように影響するのかについて検討を行った。12ヶ月の子どもを持つ母親35人を対象に、子どもの気質について質問紙での評定を求め、さらにIFEEL Pictures 日本版を用いて、乳児写真に対する乳児の情動の読み取りを求め、母親の乳児の発声・発言・思考に言及した「セリフ回答数」を測定した。子どもの気質と母親のセリフ回答数との関連性を検討した結果、気質が扱いにくい子どもの母親ほど、乳児写真に対して、乳児の発声や発言・思考に言及したセリフ反応数がより多かった。

(4) 母子関係にみる就学前児の自己理解 (大槻綾)

子どもにとっても最も意味ある他者である母親が子どもの自己表象の発達にどのように影響するのかについて検討を行った。年長児37人を対象に、インタビューで母親といるときといないときの自己について描写してもらった結果、母親といるときと母親といないときの自己では描写が異なり、変化が認められた。このことから、母親の存在は子どもの自己理解に影響を与え、自己表象の発達に影響を及ぼす一つの重要な要因となるのではないかと考えられる。

以上、本研究では、子どもにとってもっとも身近で重要な育ちの場である家族という社会的文脈の視点から、子どもの発達について実証的検討を試みてきた。しかし、今回は、個別の研究結果を超えたより包括的な議論・考察までには至らず、家族が子どもの発達に及ぼす影響や子どもの健全な心理的発達を支える家族の特徴や条件について、必ずしも十分な統括的な研究知見を示すことができなかった。今後は、より実践的で有用な知見を提供するために、複数の調査テーマをさらに絞り込み、より重層的に多角的に、家族と子どもの発達について、さらに研究を発展させていくことが必要である。